

鳥取大会と新型コロナウイルス－1か月の攻防－

【はじめに】

「鳥取で会いましょ〜う！」。2019年3月の函館大会で参加者に声高らかに呼びかけ、学会本部と開催地が一体となって取り組んできた鳥取大会は、2020年2月27日、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響により開催中止を決定した。今まさに、世界中の様々な活動がCOVID-19によって大きな影響を受けているが、1年前、本大会が中止に追い込まれることになるうとは、誰が想像しただろう。

「初めての鳥取開催」「70回という節目」という記念すべき大会。実行委員会では、私が絶大な信頼を寄せる藤本高明先生（鳥取大学）、佐藤伸先生（公立鳥取環境大学）とタッグを組み、「鳥取ならではの」の企画を、頻りに大学で、時に夜の街で酒を酌み交わしながら大いに語り合い、準備を進めてきた。

当初は「中国武漢で感染症発生」の報道がされても、大会が開催出来ないなど考えてもいなかった。ところが2020年1月以降感染被害が拡大。実行委員会はいよいよと外堀を埋められていく。鳥取大会関係者は毎日のようにCOVID-19対策で連絡を取り合った。他の学会大会やイベントの中止が徐々に聞こえてくる中、マスクや消毒用品の確保に奔走、会場・設備関係者と感染防止対策を検討するなど、安全に大会が開催できるようぎりぎりまで対策を模索した。しかし、2020年2月25日に政府からCOVID-19に関する基本方針が発表され、その時点で大会運営委員会（小畑良洋委員長 鳥取大学）は、大会参加者やアルバイト学生の健康、会場や関係機関への影響を考え大会の中止を進言。2月27日に学会理事会で中止が決定されるに至った。

大会史上初の「現地大会中止」はどのような経過をたどったのか、関係者はCOVID-19の脅威とどのように向き合い、最終的に中止に至ったのか。ここでは、1か月にわたるCOVID-19との攻防を時系列で紹介する。なお、時系列の内容は大会実施記録の記載を一部抜粋し加筆修正したものである。



写真 鳥取大学での実行委員会の様子

【鳥取大会中止に至るまでの経緯】

《2020年》

1月

(30日) 世界保健機関（WHO）が「国際公衆衛生上の緊急事態」を宣言する。

2月

(1日) 日本がCOVID-19を「指定感染症」に指定し、前倒し2月1日に施行。

(1日) 近藤哲男副会長（九州大学）から常任理事会に対し、COVID-19への対応が必要との連絡。海外からの参加者数の確認、泊数減による助成金への影響の検討を始める。

※この時点では、海外（特に中国）からの参加者減による影響を懸念。

(1日) 実行委員会が消毒用エタノール、マスクの調達を始めるが、店舗はどれも品切れ。

※消毒用エタノールをネット通販で注文するも、「いつになるかわからない」とのことで断念。

(2日) 近藤副会長が（株）国際文献社、実行委員会、プログラム編集幹事に対し、海外参加者からキャンセルが発生した場合の対応策、情報収集を依頼。具体的には、

○海外参加者の国別人数、支払状況、

○中国の参加者がゼロとなった場合の収支バランスシートの作成、

○海外参加者キャンセルによるプログラム編成への影響（時間割が虫食いになることへの

- 懸念)、
○県その他公共の対応状況、等。
- (3日) 実行委員(鳥取県林業試験場)がCOVID-19に関する鳥取県内各方面の対応について情報収集し、近藤副会長、常任理事会、本部事務局、プログラム委員会に報告。
- (12日) 船田良会長(東京農工大学)から「3月20日から東京で開催予定のWorld Wood Dayのイベント中止」の連絡が入る。
- (13日) 海外の発表予定者から、COVID-19による渡航禁止のために大会参加キャンセルのメールが来る。
- (14日) 近藤副会長と(株)国際文献社がキャンセルに関する対応確認。結果が(株)国際文献社を通じプログラム編集委員、運営委員長、実行委員会(委員長、総務)に報告される。
- (15日) 船田会長、近藤副会長が、COVID-19への今後の対応について話し合い。
- (17日) 厚生労働省HPに「国民の皆様へのメッセージ」が掲載される。
- (17日) 近藤副会長から常任理事会、本部事務局に対し、COVID-19への対応について学会HPに掲載する旨が報告される。また、発表登録者、参加登録者、ならびに学会員あてに「現段階では開催予定として準備中であるが、社会状況次第でやむを得ず中止と判断する場合には、速やかに学会Webページならびにメールにて情報を発信する」旨の一斉メールを送信。
- (17日) 実行委員会から近藤副会長に対し、懇親会とウッドサイエンスミキサーを中止せざるを得なくなった場合のキャンセル料について報告。
※本調査によって「2週間前」が中止決断のリミットであるとの共通認識。
- (17日) 小畑良洋運営委員長(鳥取大学)から、マイクやドアノブなど人が接触するものの消毒対策について提案。
- (18日) 鳥取大学にて、小畑運営委員長、川上実行委員長、藤本高明総務(鳥取大学)でCOVID-19への対応に関する緊急ミーティングを開催。以下のことを確認した。
○木材学会本部(常任理事会および事務局)の「学会開催することは、懇親会を含めて挙行する」方針で準備を進めることを確認。
○実行委員会は「講演を依頼した方々」及び「懇親会に招待した方々」に、本人の参加の意思確認を行う。特に、罹患時に重症化する可能性が大きい御高齢の懇親会招待者には、事情を説明して参加を御辞退頂くようお願いする。
- (19日) 小畑運営委員長が近藤副会長に18日の打ち合わせ内容について協議し、了解を得る。
- (19日) 佐藤伸実行委員(公開シンポジウム担当 公立鳥取環境大学)が、公開シンポジウムの講師(石田秀登氏、クリスチアン・フックス氏、臼井雅美氏)に出席の可否を打診。
- (20日) 川上実行委員長が、公開シンポジウム講師の藤本かおり氏、ウッドサイエンスミキサー講師の中江康人氏に出席の可否について打診。
- (21日) 会場で使う消毒用スプレーの調達が出来ないため、99.5%のエタノールを購入し70%に希釈して消毒用として作ることにし、科学機器代理店に一斗缶を注文。
- (21日) 鳥取県庁健康対策課から川上宛に電話があり、「日本木材学会鳥取大会では感染症対策についてどのような措置を講じる計画か?」との聞き取りをうける。以下のとおり回答。
○エタノールを準備し、会場各階に配置する。
○マスクなど、各自で必要と思われるものは準備するよう、HPで告知する。
○高齢の招待客については参加の自粛をお願いする。
- (21日) 川上実行委員長が、懇親会を実施する場合の感染症対策についてイベント企画会社に相談。トングや取り箸の共用をできる限り避けるため「屋台形式」を大幅に増やしサービスマンによる取り分けとすること、参加者が密集しないようなテーブルの配置とする、等が決まった。
- (22日) 船田会長に対し、鳥取県内の状況(イベント中止、縮小など)、県の対応について報告。
※この時点では、消毒の徹底や懇親会の運営体制の工夫などにより、実施する方針で進めていた。一方、全国各地(特に、東京、愛知)で開催される学会が次々と「中止」になっているとの情報が入りだす。
- (22日) 懇親会招待者への招待の取り消し、大会参加の自粛に関する文書を発送。
- (23日) ホームセンターやドラッグストアにて、消毒用スプレー空容器、除菌シートを購入。
※霧吹き・ポンプ式の容器はどれも品切れ状態。やむを得ずピストル式のポンプを購入。

- (24日) 川上実行委員長から藤本総務に対し、3月になったら口頭発表の座長に以下のことを連絡するよう指示。
- 飛沫感染のリスクを低くするため、各自でマスクを持参すること。マスクが無い場合は、口を覆うことが出来るハンカチやティッシュを持参すること。
 - 体調に不安のある方、高齢者、糖尿病・心不全・呼吸器疾患の基礎疾患がある方や透析を受けている方、免疫抑制剤や抗がん剤を用いている方は参加を控えること。
- (24日) 川上実行委員長と藤本総務で、公開シンポジウムの感染症対策について協議。
- 《対策案》
- 感染症対策（手の消毒、マスク着用等）に関する、会場内でのアナウンスや掲示。
 - 資料の中に、感染症に関する一連の説明書きを入れておく
- (25日) COVID-19に対する政府（新型コロナウイルス感染症対策本部）の基本方針が決定される。この中で「イベント等の開催について、現時点で全国一律の自粛要請を行うものではないが、専門家会議からの見解も踏まえ、地域や企業に対して、イベント等を主催する際には、感染拡大防止の観点から、感染の広がり、会場の状況等を踏まえ、開催の必要性を改めて検討するよう要請する。」と発表。
- (25日) 政府の基本方針決定を受け、川上実行委員長、藤本総務が大会を中止にする方針で一致。
- (25日) 藤本総務が、大会を中止した場合の収支について検討を行う。川上実行委員長と手分けをして、会場、パネル等委託会社、ホテル、旅行代理店などへのキャンセル料金の問い合わせを始める。
- (25日) 川上実行委員長が小畑運営委員長に、大会中止を本部に進言するよう発議。
- (26日) 小畑運営委員長が船田会長、近藤副会長に対し、以下の理由により大会の中止を進言。

【鳥取大会を中止とする主な理由】

- 感染拡大を防ぐために、不特定多数が参加するイベントへの参加を控えるよう政府方針が出された。
- 感染終息の目処が立たない。
- 閉鎖された建物の中に多数の参加者が長時間滞在することになるため、こまめに備品を消毒したとしても感染リスクをゼロにする保証は出来ない。
- ポスター会場はいわゆる「立食パーティ」と同じ状況となるため、集団感染のリスクがある。
- 万一発症者が出た場合、鳥取大学、とりぎん文化会館、ホテル、飲食店、JR、飛行機等の閉鎖・消毒、他の行事の中止など、両施設に多大な被害を与える可能性がある。
- 学生アルバイトに感染リスクを追わせることは、主催者として責任が問われる。また、学生がリスクを恐れて業務を拒否した場合、大会を進行できなくなる。

- (26日) 小畑運営委員長からの進言の後、近藤副会長が船田会長及び常任理事に対し、緊急のメール協議を行う。
- (26日) 常任理事会において現地での大会中止が承認される。五十嵐常任理事（東京大学）が各理事に対し、本内容について審議を依頼。
- (27日) 理事の議決が得られ、五十嵐常任理事が各理事に対しメールで報告される。
- (27日) 小畑運営委員長から各実行委員に対し、大会の中止がメールで報告される。
- (27日) 大会中止の決定を受けて実行委員会は、会場、講師、展示・協賛企業、研究会、アルバイト、委託業者等への中止連絡とキャンセル手続きを開始。
- (27日) 近藤副会長が（株）国際文献社に対し、
- 大会中止のアナウンスをHPに掲載、
 - 発表登録者、参加登録者、ならびに学会員に中止のメールを送信するよう依頼。
- (27日) 近藤副会長が、部門委員（コーディネーター、サブコーディネーター）、プログラム委員会委員、プログラム編集委員会委員、学会事務局に対し、中止についてメール報告。
- (27日) 大会中止に関する告知をHP掲載するとともに学会員と参加者にメール送信される。
- (28日) 藤本総務が中心となり、会場等キャンセルの手続きを開始。
- (28日) 藤本総務が近藤副会長、五十嵐常任理事に、現時点の会計状況をメール報告。
- (29日) 学会本部にて常任理事会が開催される。

3月

- (2日) 英語版の中止の告知文書がHPに掲載される。また、懇親会、ウッドサイエンスミキサー参加料の返金についての告知がHPに掲載される。
- (3日) 藤本総務が各研究会幹事に対し、大会中止に伴う研究会、委員会等の対応方針（後援会や幹事会等の中止・延期）について打診。各研究会から順次回答。
- (4日) キャンセル料金について、各企業から見積額が提出され始める。
- (5日) 本部事務局からプログラム要旨集広告掲載企業様、バナー広告掲載企業様に対し、掲載料金の請求書が発送される。

《終わりに—感謝を込めて—》

現地大会が中止になって半年以上経過した。多くの方に鳥取県にお越し頂き、木材研究の最前線を学び、研究仲間と語り合い、鳥取の名所や食を楽しんで頂けるよう、様々なイベントを企画していた。それだけに、大会中止に対する無念の想いが私の心の片隅にこびりついて離れない。中止決定直後は、中止や会場キャンセル等の連絡で、落ち込んでいる時間など無かったというのが正直なところで、鳥取大会への想いはむしろ、今のほうが強くなっているように感じている。

鳥取大会は現地大会が中止となったものの、幸いにも大会そのものは要旨集の発行という形で成立した。「第70回年次大会」が学会の歴史に刻まれ、発表登録者の業績として役立てたことを誇りにしたい。

次回大会（東京）はオンラインライブによる開催と聞いている。これまでとは全く違う新しい大会スタイルであり、大会関係者の御苦勞は相当なものと容易に想像できる。大会の中止を経験した者として東京大会の無事の開催と盛会を心から願うとともに、鳥取大会での経験が今後の大会運営の参考になれば幸甚である。

本来であれば、現地大会で申し上げたかったのであるが、この場を借りて感謝の気持ちをお伝えしたい。

船田良会長、近藤哲男副会長、五十嵐圭日子常任理事には、重要な場面でその都度的確な指示を頂戴した。重富顕吾先生（北海道大学）には、最も重要な任務の一つであるプログラム編成で御尽力頂いた。吉原浩先生（鳥根大学）には、学会中国四国支部長として運営に関わり、実行委員会の活動を支えて頂いた。竹村彰夫先生（NPO 法人才の木理事長、東京大学）には、公開講演会の件で御配慮頂いた。学会事務局の長崎和夫氏（事務局長（当時））、藤枝志野氏には、予算や事務処理の件で頻りに相談に乗って頂いた。河崎弥生氏（岡山県森林研究所）には、学会との連絡調整に関する様々なアドバイスを頂戴した。中国四国地域の大学、公設試各位には、実行委員への参画、企業広告や展示の募集等で御協力頂いた。鳥取県ならびに鳥取大学には、大会の運営、業務や施設利用の面で配慮いただいた。そして、小畑良洋先生、藤本高明先生、佐藤伸先生、谷岡晃和氏（（地独）鳥取県産業技術センター）、鳥取県林業試験場木材利用研究室研究員（森田、桐林、佐々木、半澤（当時））は、開催地スタッフとして共に準備に奮闘した。その他多くの学会員、企業関係者各位に支えられ鳥取大会の準備が円滑に進められたことをここに記し、深く感謝申し上げます。

中止決定後には、多くの方から励ましやねぎらいの言葉を頂戴した。本当に勇気づけられ、報われた思いがした。

そして最後に、函館大会の懇親会で行った次回大会案内で、懇親会直前の私の唐突なお願いを快く引き受けて下さり、圧倒的な存在感とアドリブで会場を大いに盛り上げて下さった、前学会長の福島和彦先生（名古屋大学）に、心から感謝申し上げます。

《執筆者》

川上敬介

※鳥取県林業試験場

※(一社)日本木材学会第70回大会(鳥取)実行委員長